



Title	「近代化」の反復と多様性：言語文化学の実践
Author(s)	伊勢, 芳夫
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 33-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/84999
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「近代化」の反復と多様性

——言語文化学の実践——

伊勢 芳夫

1. はじめに

きわめて構造主義的な考え方であるが、われわれの物質世界において、素粒子が構造を持つと原子になり、原子が構造的に組み合わされると分子になり、分子が構造的に組み合わされると組織になる。人間のフィジカルな存在においても、水素や酸素や炭素などの原子が分子を構成し、その分子が構造的に組み合わさって組織になり、その組織が合目的に構造化されたのが「ヒト」という存在である。そしてこのようなさまざまな構造の集積体というのは、物質界だけに当てはまるだけではなく、社会的なもの、文化的なものについても当てはまると考えられるのである。例えば文学作品は、文字（もしくは音素）が構造的に集まって句や文となり、句や文が構造的に組織されると文学作品になる。一方社会は、人が構造的に組織された集合体であり、人と人をつなぐのが「言葉」である。このような構造が破壊されると、建物は瓦礫になり、生命体は腐敗し、国家は滅亡する。

一方、構造を形成する構成単位が同じであっても常に同じ構造体になるわけではない。例えば、炭素元素の配列によっては炭として燃料になったり、ダイヤモンドとなって魅惑的な輝きを発するように、社会も人間の配列が異なれば、別種の社会を形成する。その多様性は社会を構成する人間の個性のレベルだけではなく、構造自体のレベルにおいても生まれてくるのである。そのことは、米ソ冷戦期の東西ドイツの体制を見れば一目瞭然であろう。

近代化以前の社会においては、その多様性を生み出す主要な要因は環境と文化によってもたらされていた。環境は自然によっても生み出されるものであるが、文化は言葉によって形成・継承される。「神」も言語によっても生み出された「象徴的」存在である。したがって「神」は無数といっていいほど存在した。極めて抽象的な「神」から、サルやネズミ、そして木や山までが「神」として崇められた（崇められている）。しかしながら「近代化」というグローバル化は、そのような前近代世界を一変させていくのである。

2. マトリックスとしての「近代化」

「近代化」は「西洋化」とも言われ、多種多様な伝統文化が「近代化」により 1 つの理

理想的な社会にいたる過程というイメージを一般に持たれている。これは「単数の文化（文明）」観に基づいた考え方である。しかしながら、「複数の文化（文明）」観というものもある。地域性や異なった価値体系による複数の文化の理想形を措定し、それぞれの社会はその社会独自の理想的な社会を目指しているという考え方である。この「複数の文化（文明）」観をイメージするのに参考になるのは、その発見がメディアで大々的に取り上げられた iPS 細胞という「多能性幹細胞」であろう。その細胞は、培養の仕方により様々な組織を形成する、いわば万能細胞である。前近代において文化が自然や偶然的要因により培養されて様々な形態の文化へと発達したとするのなら、「文化」は本来「多能性幹細胞」のような性格を有していると考えられる。もし人為的・科学的に培養させていくプロセスが「近代化」であり、そこから自然や偶然的要因が排除されないのなら、依然として「多能性幹細胞」としての文化はさまざまな形態の「近代的文化」として発展していくだろう。

そこで、「多能性幹細胞」としての文化に対して、前近代とは異なった発展を促進する世界的な現象としての「近代化」の定義の試みとして、2013 年に出版した拙著『「反抗者」の肖像——イギリス、インド、日本の近代化言説形成＝編成——』¹ の続編である『「近代化」の反復と多様性——「東と西」の知の考古学的解体——』² では、従来の定義から時代性や地域性を捨象し、さらに現象のプロセスに焦点を当てた定義を以下のように措定した。

「近代化」というのは、自然を、直観ではなく、観察・分析することによりその法則性を体系的に認識することで、自然の力をより効率的に利用していくプロセスであり、「近代社会」とは、近代化プロセスにより質的に変化した認識のエピステーメ的増大により、学問・教育・情報、産業技術、社会制度、軍事の面で大転換が起こった社会のことである。

『「近代化」の反復と多様性——「東と西」の知の考古学的解体——』では上記の「近代化」の定義を前提としたのだが、この純粋な形態としての「近代化」というのは、もし「多能性幹細胞」としての文化を成長発展させる触媒の属性を持っているのなら、決して伝統文化の淘汰を伴うことはなく、伝統文化、そしてその媒体である自然言語、またその自然言語によりコミュニティの構成員の行う思考を質的に変化させていくものである。つまり、伝統的な文化を質的に変えていき合目的性に適った文化を形成発展させていくプロセスが近代化なのだ。また、近代化を推し進める科学的思考のために「西欧語」を習得する必要はない。いかなる母語も科学的思考を可能にする言語へと変質させればよいことである。このような前提から、西欧近代だけではなく、さまざまな言語・伝統から生まれる近代化の変種が存在するという仮説を提示できる。

¹ 伊勢芳夫、マムヌール・ラハマン（研究協力者）、『「反抗者」の肖像——イギリス、インド、日本の近代化言説形成＝編成——』、溪水社、2013。

² 2021 年 6 月 1 日に溪水社から出版。

3. 「近代化」の反復と多様性

昨年度の言語文化研究科共同研究プロジェクト報告書に掲載した「ポストコロナに言語文化学ができること——マニフェスト——」³ という小文において、言語文化研究の1つの方法論について言及し、次のようなプロジェクトを概説した。すなわち、前著の『「反抗者」の肖像——イギリス、インド、日本の近代化言説形成＝編成——』では、19世紀における西欧の近代化言説形成の帝国主義的拡張により、その言説編成の網に取り込まれた非西欧圏が「近代化／西洋化」されていった。その中で、多くの非西欧地域では、近代化という名の下で植民地政策が実施され、現地語や伝統的文化を否定もしくは他者化される一方で、西欧の経済圏の枠組みに組み込まれていった。一方植民地化を逃れた日本は、西欧の「模倣者」／「ハイブリッド」となり、西欧の垂流の近代化言説形成を周辺諸国へと拡張していったのである。

続編の『「近代化」の反復と多様性——「東と西」の知の考古学的解体——』においては、19世紀のイギリスを中心とする西欧帝国主義が第2次世界大戦によりアメリカの「新帝国主義」に取って代われ、その世界体制の下、次々に独立した被植民地地域が独自のナショナル・アイデンティティ形成を、伝統文化と宗教、旧植民地体制の残像、アメリカの世界戦略としての資本主義の影響のなかで、模索しながら形成／分裂していく過程を扱った。被植民地であった地域のなかでは、特に第2次世界大戦直後から現在までのインド・バングラデシュ、および、台湾のナショナル・アイデンティティ形成の試行錯誤の過程を詳しく論述した。欧米諸国のように近現代史の情報が比較的詳細に世界的に拡散しているのとは違い、被植民地のポストコロニアル状況は、「解放闘争」、「独裁」、「民主化」、「工業化」、「原理主義」といった単色で色づけられて報道されている。⁴ しかしながら、実際のポストコロニアル状況におけるナショナル・アイデンティティ形成の過程は複雑に絡み合ったベクトルによって織りなされているのである。たとえば、分離独立後のインドをけん引したネルーは、世俗的・中央集権的であったが、ネルー以降地方主義が台頭するとともに、インド国民会議党の勢力の衰退とは逆にヒンドゥー教主義者が優勢になってきている。バングラデシュも、世俗主義／イスラム教主義、ベンガル志向／バングラデシュ志向のベクトルのせめぎ合いによってナショナル・アイデンティティの紆余曲折の発展形成を見せている。また台湾では、国民党による中華民国と外省人（台湾人）による「中華民国」／「台湾」の綱引きに、中国が干渉するという構図である。

日本については、第2次世界大戦の一方の陣営である枢軸国の1員としての敗戦をきっかけに、その「近代化」は変質したといえる。これは第2次世界大戦の中で日本が戦った戦争の名称が「大東亜戦争」から「太平洋戦争」に変わったこととかなりの程度まで一致する。つまり、明治から昭和初期までの日本の「近代化」が西欧の「模倣者」／「ハイブ

³ 「ポストコロナに言語文化学ができること——マニフェスト——」、『言語文化共同研究プロジェクト2019: Cultural Formation Studies (2)』（大阪大学大学院言語文化研究科、2020）、pp. 57-62。

⁴ Edward W. Said, *Covering Islam* (New York: Vintage Books, 1997) のアメリカにおけるイスラム報道の分析は、世界的に流通する非西欧地域に関する情報の特性を知るための参考になるであろう。

リッド」であり、ひたすら「近代化＝西洋化」に努めてきたのであるが、1931年の満州事変勃発を契機に米英の日中戦争に対する日本批判と援蒋行動に直面し、欧米の「反抗者」に転じた日本のいわば“dependency complex”としての「近代化＝西洋化」の反動が「大東亜戦争」であるとすれば、一転してGHQによる占領期からの日本の「近代化」がアメリカの「模倣者」／「ハイブリッド」——いやむしろアメリカ「新帝国主義」に組み込まれた優等生というべきかもしれない——として「近代化＝アメリカ化」となり、アメリカの描く世界地図——その地図には19世紀の覇者であり旧帝国主義国のイギリスやフランスの存在が捨象されている——のなかでひたすら経済発展に集中するのである。『「近代化」の反復と多様性——「東と西」の知の考古学的解体——』では、その劇的な変容のプロセスをGHQの占領政策を分析することで明らかにするとともに、日本人が過去の帝国主義の記憶(不償)とどのように向き合おうとしてきたのかを検証した。それから、かつて東西冷戦時代の東の陣営の覇者であった旧ソ連(現ロシア)のヨーロッパでもなくアジアでもないナショナル・アイデンティティについても概観した。

これらの概観から、上記のポストコロニアルの国々が多様な道をたどって「近代化」していることがみてとれる。繰り返しになるが、果たしてそれらの「多様な道」を単なる近代化への「道草」をしていると片づけられるのであろうか。確かに最近のミャンマーの動向を見ると、アウンサン・スー・チーの指導の下で民主化を推し進めていく過程で、軍のクーデターにより軍政に戻ってしまったことをメディア報道で知るとき、反動勢力によってミャンマーは後戻りしたと考える人は多いかもしれない。しかしながら、単純な「反動」と断罪出来るのであろうか。ジョージ・オーウエルが描いた植民地下のビルマ(ミャンマー)、第2次世界大戦中には日本軍とイギリス軍の戦場となり、その後の独立と軍政、そしてスー・チーの下での民主化の一方、ロヒンギャに対する迫害、そしてこの軍事クーデターと、ミャンマーのこのようなナショナル・アイデンティティ形成もさまざまなベクトルの絡まった固有の且つ必然的な過程としてみる必要があるのではないだろうか。

ただ世界の言説編成のドミナントな国の影響を無視できるかという点、そうではない。コロニアル時代の近代化は「近代化＝西洋化」であるといったが、その際の近代化政策には西欧列強の利害や政治的思惑という影が付き纏っていた。例えば英領インドの近代化政策には、イギリスの政治的・経済的システムにインドを取り込む思惑があった。第2次世界大戦後の占領軍による日本の「近代化＝アメリカ化」においても、そのような思惑があったことは、例えば日本に優生保護のイデオロギーを広めるような働きかけが表面下でなされていたことからみてもとれる。これは日本人の人口を抑える目論見であったのだろう。

4. 「近代化」という触媒とサイド的「東と西」

19世紀から20世紀における西欧諸国の「西」とそれ以外の地域の「東」というサイド的オリエンタリズムによって特徴づけられる「東と西」の二項対立的構造は、西欧人ばかりではなくわれわれアジア人の世界観にも深く根付いているといえる。「先進的な西洋」に

対して「後進的な東洋」という構図であり、そこから「近代化＝西洋化」という方程式が生まれてくるのであろう。しかしながら、今日の家電から自動車、ICチップからスーパーコンピュータに至る工業製品においては、日本製、韓国製、中国製、台湾製が世界を席卷しているところからも、「近代化＝西洋化」はもはやテクノロジーの分野では死語になっていてもおかしくない。それ以外の芸術などの分野においても、西欧圏以外から発信されるものは少なくない。皮肉なことに、現在進行中の新型コロナウイルス感染においては、「ロックダウン」などの強硬政策をとっているにもかかわらず西欧諸国の多くはけた違いの感染被害を被っている。これを単純に人種的特性に結び付けるのは早計であろう。「人と人との距離」についての考え方の違いなど文化要因も決して小さいとは言えず、その意味においては、西洋文化が現在の状況に適応しなくなっているともいえるだろう。もちろん西洋文明がかつてのインカ文明のように滅びるといっているわけではなく、「西洋近代」とは違った「近代」が、環境の激変に伴って世界のドミナントになることの可能性を言っているのである。その意味で、純粋な「近代化」自体は「西洋化」と等価ではなく、文化フリーの「触媒」としてその社会の事象の法則性を体系的に認識することで、より効率的な構造体へと社会を変容させていくプロセスである。

このように植民地支配から解放されたアジア世界が、独立国としてのコミュニティにおいて「反復」と「反動（反抗）」の対立するベクトルによる振り子運動のなかで新たな近代的ナショナル・アイデンティティを模索していくことにより、西欧中心の「東と西」構造は弱体化しつつあるという歴史の流れが、『「近代化」の反復と多様性——「東と西」の知の考古学的解体——』の第Ⅱ部で扱ったインド、バングラデシュ、そして台湾の分析から見て取ることができる。それらの国々は自分たちのナショナル・アイデンティティを見出す倦むことのない模索を続けているのである。その結果として、現実の世界においてはさまざまな「声」が不協和音をなして併存することにより、19世紀西欧帝国主義下の「東と西」言説支配は解体しつつあるといえる。一方日本においては、未だ「近代化＝アメリカ化」の影響は強いのであるが、「GHQ占領下世代」及び「GHQ占領下世代を親とする世代」が高齢化することにより、その影響も薄れていくと思われる。

「近代化＝アメリカ化」以外に、東西冷戦期においては旧ソ連を震源地とした「近代化＝共産主義化」という世界的な言説編成が東欧圏を無理やり「ユニゾン」に収斂しようとしていたのであるが、その異種ともいべき「近代化＝中国化」という言説編成＝形成が新たな「帝国主義」へと成長を続けている。もっとも、その「ユニゾン」を強いるベクトルの方も、1つのイデオロギー、1つの価値観でもって世界を飲み込むような言説編成にまで膨張するかについては疑問の残るところである。だからといって、世界的な言説形成＝編成が弱体化し、地域主義が台頭してきたというわけではないようだ。むしろ、今日の世界を覆いつくそうとする言説編成はさらに複雑な様相を見せているといえるのではないか。

繰り返しになるが、ソビエト連邦の崩壊の後、アメリカの1国支配が継続すると思われたが、アジアの中で中国が台頭し、今やアメリカと世界の覇権を競う超大国になっている。

またそれ以外の旧植民地の経済発展も目覚ましいものがある。したがって、被植民地の独立後のポストコロニアル期は終わり、新たな世界になってきている。その意味するところは、世界のパワーバランスに非西欧諸国がプレイヤーとして参戦することでさらに混とんとした状況になっていくということであろうか。一方で、IT 技術の驚くべき発展した今日の状況を観察するとき、われわれの思考・行動を規制する新たな世界規模の言説形成＝編成が生まれてきているのではないかと感じられるのである。それはこれまでの「グローバルイズム」というアメリカの世界的な言説編成による規制の網ではない、明らかに別種のものである。また、それはジョージ・オーウェルの 1984 の監視社会とも違う、新たな言説形成＝編成は、IT などのテクノロジーを駆使し、われわれの思考・行動を規制する網を張り巡らそうとしている。その言説形成のエージェントはおそらく極めて「匿名性」の高い存在なのかもしれない。そして、確固とした「価値の源泉」に根差したのではなく、ある種の突発性や偶然性によって竜巻のように発生しては消滅を繰り返すプロセスそのものかもしれない。

筆者は「文化」を限りなく増殖するアミーバとしてイメージすることがある。2021 年の現在、新型コロナウイルスが世界で猛威を振るいつづけ、われわれの社会とその「価値の源泉」を変貌させようとしているが、その最中で感じることは、この新型コロナウイルスは、われわれの思考・行動を規制するという意味での「文化」と共犯関係を結び、権力者を脅かし、実際に失墜させる一方で、管理社会はますます管理の度合いを高めるなど、それ以前とは違ったふうに世界を変質させようとしているのではないかということである。そしてその両者とも目に見えないということだけではなく、表面的には自由な／無症状な感染者がさらに多くの感染者／反復者を増殖していくという点で、テクノロジーによって引き起こされる変化とも相まってその影響力は突発的・爆発的である。

その意味で、われわれは、これまでにないグローバル化が進み、思わぬところからわれわれの世界、われわれの「価値の源泉」を一瞬のうちに変容させる新たな言説形成の進行する世界に生きているのかもしれない。

言語と文化、そして言語に蓄積された記憶とその伝搬／拡散が、われわれの国家、コミュニティ、アイデンティティ、思考、そして世界観に深く作用し影響することで「価値の源泉」を変容し新たな言説形成を進行させるのである。そのような前提に立てば、存在論的に言っても、どの言語を使用し、どの文化を身に付けるかの選択、あるいは強制されるかだけではなく、情報がどれだけ迅速に伝達され拡散するか、伝達される情報の信頼性がどれほど担保されるかは、われわれの存在自体にかかわる大きな問題なのである。

5. 言語文化研究の実践

令和 3 年 6 月刊行の『「近代化」の反復と多様性——「東と西」の知の考古学的解体——』では、編著者の伊勢は主に前著の「反抗者」と「反復者」の概念を理論的に整理し、研究協力者でバングラデシュのイスラム大学教授のママヌール・ラハマンは、インドとバングラデシ

ユのナショナル・アイデンティティ形成の推移を単一化と多様性の2つのベクトルの働きに沿って再現前化した。具体的には、インドのヒンドゥーイズム（ヒンドゥー原理主義）と世俗主義（ムスリムに対する寛容政策）、バングラデシュではイスラム主義（イスラム原理主義）と世俗主義（ベンガルの宗教混交主義）の対立ベクトルの抗争の中で近代国家建設が行われてきたとする。そこに、特定の言語を国語化する言語政策への推進と反発、地域主義や国際関係も絡んでくる。ラハマンの見解では、インド・バングラデシュ両国の現在の流れ、特にインドのナショナル・アイデンティティ形成においては、宗教原理主義が優勢になってきているとみている。

本論3節『「近代化」の反復と多様性』でも書いたが、『「近代化」の反復と多様性——「東と西」の知の考古学的解体——』においては、人間の内面を読み取る方法と社会科学的な分析とを併置し、主観・客観の切り分けできない世界を再現前化しようとする野心的な試みを行っている。上記のインドとバングラデシュ以外にも、占領期の日本の人口問題を社会的に分析し、GHQが日本の優生保護主義者を利用することで産児制限を推進しようとしたことを明らかにし、また独立後の台湾については、言語政策の面から「台湾人アイデンティティ」の形成過程をたどり、「満洲国」については日本人の記憶の面からいかに戦後の日本人が旧植民地と向き合う／隠蔽してきたかを論じ、そして、ソ連／ロシアについては、映画に投影されたロシア人の内面表象から「東と西」軸におけるソ連／ロシアの独特な立ち位置を浮き彫りにした。サイドのオリエンタリズムの支配していた19世紀から20世紀にかけての「東と西」の座標軸において、「東（オリエント）」は西欧の欲望の投影されたイメージとして固定されており、十把一絡げのステレオタイプとして「東洋人」表象が流通していたのであり、それはポストコロニアル期においても残像として存在していて、良くも悪しきも日本を含めた旧植民地国家は「近代化＝西洋化」のプロセスをたどると考えられる傾向がある。しかし上記の分析から、それぞれに地域、民族の文化や歴史がその過程に大きく影響していることがわかる。すべての国が、植民地支配から解放され、独裁者を追放すれば、「西洋近代」のような国家になると考えるのは、きわめてナイーブな考え方であろう。「西洋近代」は数ある「近代化」の1つにしか過ぎないのである。

冒頭にもふれたように、生物学的には「同じ」人間の集団であっても、それぞれの集団は様々な変異の社会構造を形成する。そしてその変異を作り出している主要な要因が言語と文化である。それゆえ、東アジア、さらに世界を理解するためには、それらを構成するコミュニティの言語文化を理解しないとイケない。その理解の一助として、『「近代化」の反復と多様性——「東と西」の知の考古学的解体——』が文系研究の寄せ集めではない言語文化研究の「始まり」となる1つの契機となればと考える。

6. おわりに

昨年からの新型コロナウイルス感染拡大の下、インターネットの使用が強制力を持って飛躍的に拡大し、人が空間的に移動することが「時代遅れ」とみなされる風潮が生まれてきている。さらにワクチンの供給量と接種を受ける人々の数を国が競っているのが、実際の感染者数とそれらとは密接につながっているのであろうか。多くのメディアは具体

的な数値の内訳をほとんど報道せず、おおざっぱな数字を出して危険を煽っているように見える。このように今日の世界は、良くも悪しきも情報／情報化のグローバル化が進んでいる。それを「時代の趨勢」とみなして無条件で受け入れていいものであろうか。ネット情報の多くは恣意的であり、それらを甘受する必要はないであろう。さりとて、原理主義的に闇雲に抵抗することにも問題がありそうだ。メリット・デメリットを評価するためには、多様ななかで相対化する必要があり、今こそメディア・リテラシー教育の重要性が増している。さもないと、イソップ寓話のロバを売りに行く親子のように、大事なものを失ってしまうことになるであろう。

このグローバル化への対応は、今進行しつつある学問領域の横断化・超域化の流れにも当てはまる。学問領域の超域化に対して、原理主義的な抵抗として蝸壺に閉じこもるようだと、社会と共有できる研究成果など生まれてこないだろう。しかしながら伝統的なディスプリンに固執しながらただ雑然と違う分野の研究者が集まっても、そこからは意味のある研究成果は生まれてこない。そのような意味で、言語文化研究は大学における研究に新たな展望を開くものと期待できる。